

日本臨床教育学会 第1回研究大会 2011年10月1, 2日 北海道教育大学札幌校
シンポジウム2 10月2日(日) 9:30~11:30

北海道の子ども・若者と臨床教育学 報告(1)

『引きこもりの若者と生きる』~11年間の若者との共同生活の中から見えてきたもの~

安達 俊子(青少年自立支援センタービバハウス)

はじめに

2000年9月1日にビバハウスを開設してから、この9月1日で満11年を迎えることになった。この間全国から、民間施設のビバハウスおよび厚生労働省よりの委託を受けた、若者自立塾(5年間)、現在年間4コースを実施している『緊急人材育成支援事業・基金訓練』を合わせると少なくとも500人以上の若者を受け入れた。

もともと私の北星学園余市高等学校退職に伴う、数多くの生徒たちや親たちの各種の相談に対応しているうちに、家庭の事情で、どうしてもこのまま放置しては置けない、26歳の卒業生(女性)を引き取って、一緒に暮らさざるを得ない事態に遭遇したことがビバハウスの発足となった。

ビバハウスの現在

発足当初はかなりの比率で、北星の卒業生を迎え入れていたが、発足数年後のHP開設以来は、全国からの問い合わせに対応せざるを得なくなった。ビバハウスおよび関連施設の現状は、現在ビバハウスのスタッフは5人、受け入れている若者は、男性9人、女性4人。厚生労働省よりの委託事業を運営する「有限会社青少年自立支援センタービバ」には、7人のスタッフが、男性7人、女性4人の基金訓練生を受け入れている。

若者の変容

この10年のうちに、ビバに来る若者たちの様相も大きく変化した。発足後4,5年ほどまでの若者の特徴は5年、10年という長期の引きこもり経験者や、何らかの精神的疾患に苦しめられているものもいたが、たいがい人なつきが良く、スタッフの様々な指導も、多くの場合素直に聞き入れ、自らの成長に生かせる若者が多かった。

この数年、特にこの2,3年の若者たちの様相は、これまでと根底的に違ってきた。人の言うことはまず疑ってから、どうするかを考える。周りの者たちが自分をどのように見ているのかだけが気がかりで、自分自身をありのままに受け入れることが出来ない。自分だけが特別に厳しく扱われ、特別に常に追及されていると思い、他のメンバーに対する対応との些細な違いにも我慢が出来ず、常に不満と抗議に明け暮れる。

この若者たちの変容はどこから来るのだろうか?比較的早い時期にビバにたどり着けた若者に比べ、最近年に来るようになった若者たちは、それだけ傷が深いのかとも思われるが、現代日本社会およびその変化をもっとも直接的に影響を受ける『教育』のありように、根源的な問題があるものと考えざるを得ない。以下、もっとも際立った2例を挙げて、具体的にビバが抱えている若者の実像をお伝えしたい。

『こんな私でも、生きていて良いのでしょうか？』

道内の 26 歳の女性の創作のテーマである。彼女はすでにかかなりの数の短編を創作し、その内のいくつかを私たちにも読ませてくれた。彼女は小学 5 年生で不登校になり、約 15 年間の自宅生活の後、1 年半ほど前にビバに来た。ビバでは依然として集団生活にはなじみず、ほとんど自室での生活をしている。彼女が最近見せてくれた作品は、『雅良は雅良が要りません。貴方は雅良が要りますか？』というものだった。

『雅良』という、時空を超えた、ほとんど正体不明の主人公は、『自分自身にも必要とされないほど半人前で、正気じゃなくて、役に立たない人間でも生きていてもいいのですか？』とのきわめて重たい質問を私たちに投げかけている。

『障害があっても、生きることを諦めない！』

道内の 24 歳の男性。道内のある私立大学に進学したが、いじめに会い退学。いじめは主に彼の肉体的欠陥に関するものであったという。数年間の自宅引きこもりの後、ビバハウス、および、『基金訓練 6 ヶ月コース』の合宿生活で就労訓練を受けた。訓練終了後も、身体的条件のため、就労が出来ず、再びビバハウスでの生活に戻った。最近、道内のある私立大学で私が受け持つ『総合講座』（文学部心理応用コミュニケーション学科）で、約 90 人の学生を前に、当事者として自らの歩みを語った。彼の『障害があっても、生きることを諦めない！』との訴えは、すべての学生の感動を呼んだ。螺旋階段のように、時には上っている実感が得られないような毎日の生活の中での彼の苦闘をお伝えしたい。